

連載「大友時代を生きた人々」

## 国際文化学部鹿毛敏夫教授の

# 「月山～伊勢参詣した府内の唐人～」が掲載

●大分合同新聞 2018年2月24日(土)

## 大友時代を 生きた人々



鹿毛 敏夫

天正16～19（1588～91）年の九州から伊勢参詣した人物の名前を列記した「天正十六年参宮帳」。その筆録者である福島御塩焼大夫家の江戸時代の門が、現在も神宮文庫（三重県伊勢市）の表門（通称「黒門」）として移築保存されています。堂々とした邸門で多くの参詣者を集め世話をした神宮御師の威勢を感じるものです。

この「参宮帳」の参詣者リストのなかに「月山」「けんさん」「ふくまん」「ゑんはい」などの奇妙な名前の人々がいます。彼らはいずれも豊後府内（大分市）の唐人町からの参拝者で、戦国時代の在日中国人と言えます。このうちの「けんさん（見山）」は、元龜2（1571）年、臼杵でまだ若かつた狩野永徳に中国画の技法を伝授した樹岩見山であることを以前に紹介しました。

一方、「月山」について、これも「見山」の読み違えではないかと思い、東京大

学史料編纂所の謄写本（書き写し）で確認ましたが、『大分県史料』翻刻文通り「月山」という文字に間違いないではなく、振られているルビも「けつさん」と読めました。「月山（げつさん）」は、「けんさん」（樹石見）ではなく、振られているルビも「けんさん」と読みます。

## 月山

その遺物を見て、「このブタを月山さんが食べたのか」「ゑんはいさんは割れても修理してこのお碗を使つてたんだなあ」と想像を膨らませるのは、私だけではないでしょう。

## 伊勢参詣した府内の唐人



伊勢御師福島御塩焼大夫邸の門（三重県伊勢市）

「月山」ら戦国時代の九州に渡来した中国人は、唐人町で中国式の衣食住生活をしていました。しかしながら、彼らは決してマイノリティーとして孤立したのではなく、日本人と連れ立つて伊勢参拝し、また日本人が憧憬する中国画（水墨画）の技法を教えたりと、異国での文化交流を楽しんでいるように見えます。（名

山）とは別の渡来中国人とわっていたものとされ、唐人町在住の中国人が食べた古学調査では、ウシやビタの骨、骨牌（中国ではやつていた遊戯具）、鎌接ぎの痕跡のある青花碗など、他の町とは異なる中国特有の遺物が出土しています。

当時の日本人にウシやビタを食する習慣はなく、しかも分析では家畜として飼育で、在住中国人が来日前に愛用していた碗を中国で補修し、それを日本に持ち込んで使っていたと考えられます。

「月山」ら戦国時代の九州に渡来した中国人は、唐人町で中国式の衣食住生活をしていました。しかしながら、彼らは決してマイノリティーとして孤立したのではなく、日本人と連れ立つて伊勢参拝し、また日本人が憧憬する中国画（水墨画）の技法を教えたりと、異国での文化交流を楽しんでいるように見えます。（名

教授）  
古屋学院大学国際文化学部  
||毎月1回掲載||